現実世界モンスターテイマー

ボナンザ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

現実世界モンスターテイマー

【Ｎコード】

Ｎ２９０８ＢＡ

【作者名】

ボナンザ

【あらすじ】

ある日突然現れた小さな子。その子は異世界の獣人だった。地求人初のモンスターテイマー、海野遊（うみのゆう）が行く異世界ファンタジー探検記と地球で織り成す異文化交流学園物語。「おい、馬鹿。学校には付いてくるなって言っただろ（鞄に向かって小声で）」「お、王女様！？　何でこの学校に！？」を地で行く作品。

０１話　初めての召喚？

海野　遊（ゆう）にとっては、その日は別に特別な日というわけではなかった。
いつものように学校を終わらせ、部活をやってる健全野郎やデートをするリア充野郎を尻目に、自宅に帰っただけである。
本屋によって週刊漫画雑誌を買い、両親のいない一軒家に戻ると、そのままＰＣのスイッチとゲームのスイッチを入れて、暇をつぶす。腹が減ったらスーパーに行って、弁当や惣菜を買って食べる。宿題を終わらせ、買ってきた漫画雑誌を読みながら眠る。
そんなありきたりの一日だった。
断言しよう。
変な行動などしていないと誓えるし、夢遊病と診断された覚えもない。
しかし何故かこんな事になっていた。
遊が目を覚ましたら、目の前にはすやすやと眠る子どもがいたのである。

――――現実世界モンスターテイマー――――

それは、一目見た感じでは、男か女かはわからないくらい中性的で幼い子どもだった。
目をつぶっていることから、瞳の色はわからないが、ぱっちりとしたくりくりなサイズだろうとまぶたから推察できる。

髪の色は淡い銀色。白、とも思えるほどの透明度。
肌の色は、プール姿が似合いそうな健康的な褐色。
しかし一つ気になることに、その子どもには頭の上からぴょこんと、可愛らしい耳が生えていたことである。
それは遊がちょっと触ってみたら、それに反応してピクピク動く。
しかも「ふにゅう」という可愛らしい吐息のおまけ付きだ。

（えっ。なにこれ？）

遊はやっと意識をはっきりさせた。
目の前の事態に眠気が吹き飛び、頭がこんがらがる。

（あれ。えっ？　なにこの状況？　誰、この子？　コスプレ？　でもこんな高性能な耳の道具、現実にあるの？　いや待て待て、それ以前の問題として、何でこんな子がここにいるんだ。あっ、もしかして泥棒か？　けど、こんな子どもだぞ？　幼稚園児くらいにしか見えないじゃん？　それに泥棒が添い寝なんて……）

遊は自分のほっぺを、ちょっと強めにつねってみる。すると、きちんと痛かった。ということは夢ではないということだ。
遊はそっと布団をあげてみた。
その子の全身像を把握してみようと思ったのだ。
しかしすぐさま、ばさりと閉じた。
そこには見てはいけないものが広がっていた。
その布団の下には、『彼女』の裸体があった。
小さな赤い未熟なつぼみに、ぽにぽにのお腹。そして股には、ぴっちりと閉まった一本の縦筋。
彼女は上はおろか下だって、布切れ一枚付けていない。

（何だよ……おい……）

遊は慌てて、彼女から少しでも距離を取ろうと、ベッドの端に身を寄せた。
悪いが覚えは全くない。
間違いはなかったと信じたい。
しかし、現実はそうは言っていなかった。
他人が見たら、１００％アウトなこの状況。
弁明の余地などまるでない。

（警察……呼んで大丈夫か？）

相手が小さな子どもということが幸いして、身の危険はまるで感じない。
だから遊には思考する時間があった。

（いや……警察に電話しても、俺が犯人扱いされたりすんじゃね？
この状況だと）

司法をそこまで信じていいものか、遊には判断がつかなかった。
明日の朝刊に――――変態高校生、幼女誘拐してコスプレ猥褻。なんて載る可能性は否定できない。
しかし、他に方法がないのも事実だった。
窓から入り込む朝日は、すでに結構な明るさになっている。
そうっと起こさず抱っこして、外に放り出すにしても、目撃されるリスクは高い。
かといってこのままグズグズ考えていても、彼女が目を覚ませば終わりである。
明確に測れない残された時間の中で、遊は懸命に考える。
そして一つの考えに行き着いた。

（よし。見なかったふりをして、学校に行こう）

それは全てを放り出すアイデアだった。
帰ってくれば、この子もいなくなっていると、思ったのだ。
万が一残っていたとしても、朝一１１０番よりははるかにマシである。一夜を共にしたわけではないという意味でだ。
すると丁度その時、ジリリリリリッという甲高い機械音が、部屋の中を突き抜ける。
遊には見なくても理解できた。
それは６：３０を示す時計の音だ。
遊は慌てて手を伸ばすが、それはすでに後の祭り。

「う～ん……」

目の前の子どもがごそごそ動いたかと思うと、目を擦り欠伸をした。
遊はひいっと息を呑む。
終わった。と本気で心から思った。
目の前の子どもは、うっすらと開けた瞳で遊を見つめる。
そして小さく可愛らしい声で、言った。

「あっ。ご主人しゃま……」

遊は恐怖と驚愕の入り混じった顔でその子を見た。
喉の奥から「へっ？」という、何とも情けない声が勝手に出た。

01話　初めての召喚？

「ご主人様……って俺が？」
「あい？　そうでしゅけど？」

子どもは布団にくるまったまま、不思議そうに遊を見る。

「いや、えっと……ごめん。いつ俺がご主人様になったの？　ってか君、誰？　どこの子？」
「えっ？　あっち？　あっちはヨンガヨンガ族のパリィでしゅけど？　昨日ご主人しゃまがあっちを喚んで下さったんじゃあ、ありませんか」

するとパリィは「あっ」と呟いた。
どうやら何かに気づいたようだ。

「そ、そういえばそうでしゅた。昨日喚ばれたのはいいでしゅけど、ご主人しゃまが眠っていたから、起こすのもまずいかなと思ったんでした」

パリィはあわあわと慌て、すぐさまベッドから飛び降りると、床の上にぺたんと座ってお辞儀をする。

「ヨンガヨンガ族のパリィでしゅ。召喚してもらって嬉しいでしゅ。精一杯頑張りましゅ」

丁寧な挨拶だった。
しかし遊はそれに反応することができなかった。日の光の下、全

身が顕になったパリィのとある一部分に、目が釘付けになってしまったのである。
パリィのお尻から突き出た一本の大きく逞しい尻尾が、空気に揺れるようにふりふりと動いていた。
それは目を擦り、見直してみても、変わらない。
銀狐のようなたくましい尻尾だ。
しかもよく見ると、パリィの手の先足の先には共にふさふさの体毛が生えていた。
爪も太く、長い。

（コスプレ、にしちゃあやっぱ出来が良すぎだろ）

ピコピコ動く耳もそうだし、何よりあれほど自然に動く尻尾の軌道。
相当な金がかかっているとしか思えない。
しかもこの集大成を、こんな凡人に見せて何の得があるというのか。
遊は本当にパリィが召喚された獣人なんじゃないかという錯覚に陥る。
あり得ないことだが、そっちの方がしっくりくるような気がしたのだ。
するとその時、グルルルルという、低く唸るような重低音が部屋に響く。
音の出所は、パリィの腹部からだ。
パリィはぺたりとうつ伏せた。

「あう〜、ご主人しゃま。お腹が空いたでし〜」

懇願するように、床から上目づかいで遊を見る。
遊は頭をぶんぶんと振って、立ち上がる。

「えっと。ひとまず、これを着てくれるかな」

遊はタンスから、小さめのTシャツを取り出すと、パリィに向かって放り投げた。

パリィは相変わらず裸である。

四肢の先端は毛で隠れているが、重要な部分はまるっきりの無防備だ。

「えっと、これってどうしゅればいいんでしゅか？」

パリィがTシャツをぐにぐにと伸ばしながら問いかけた。

遊はパリィに万歳するように促し、そして頭から服を着せてあげる。

「おおっ！　しゅごいっ！　軽くてスベスベでしっ！」

そうして立ち上がったパリィの姿は、Tシャツなのにワンピース姿であった。

遊の腰までしか身長がないから当然だ。

しかも下着は無装着。

トランクスを貸すべきかとも思ったが、履かしてもずり落ちるだけだと判断し、遊はそのままタンスを閉じる。

「えっと、ご飯だっけ？」

「はいでしっ！」

「じゃあ、下で食べよっか」

警察に電話するのは、一旦保留にしようと遊は考えた。

遊の後ろを、まるでカルガモの子どものように、パリィはニコニ

コ笑顔で着いてきた。

01話　初めての召喚？

階段を降りてダイニングに出ると、パリィはキョロキョロと忙しなく辺りを見回していた。
見るものどれもが目新しいようで、感嘆の声を上げだした。
遊が電気をつけると、びっくりしたのかその場でビクッと飛び跳ねる。
まるで原始人のような反応だ。
「ひ、光魔法でしか？」
魔法、という単語が気にかかったが、遊はひとまずスルーする。
「電気だよ。このスイッチを押せば誰でも付けられるんだ」
遊は何度かスイッチを押して、電気を点滅さしてみる。
するとパリィは目をキラキラさせながら遊に近寄り、後についてボタンを押す。
それに反応して、蛍光灯がぱちりと光る。
「おおおっ！」
パリィは何度も繰り返す。
スイッチは少し高いところにあるので、ぴょんぴょんと跳ねながら。
蛍光灯の点滅に合わせてTシャツの下の尻尾が揺れる。
楽しくてしかたないと全身が表現していた。
遊はがちゃりと冷蔵庫を開けた。

そしてビニール袋に包まれた、食パンを取り出した。
遊の好みとしてはご飯なのだが、朝から炊くのは面倒で、毎日パンを食べている。
超芳醇の5枚切りはお気に入りだ。
するとパリィが駆け寄ってきた。

「なんでしか、今度は！？」

パリィは遊の下から冷蔵庫を覗き込むように入り込むと、すぐさま自分の鼻を押さえた。

「うわっ、しゅごい臭いでしっ」

見た目通り嗅覚が発達しているのか、冷蔵庫内の臭いはいささか強烈だったようだ。

「冷蔵庫、って言ってな、この中にご飯になるものを保存してるんだよ」
「おおっ、なるほど。確かにすっごくひんやりしてるでし。ということは、氷魔法の一種でしか？」
「いや、魔法じゃなくて、これもさっきの光るやつと一緒で電気の力」
「へえ！　これもデンキでしか！　やるでしね。そのデンキってやつは」
「あっ、そうだ。パリィちゃんはこれ食べれる？」

遊はパンを一枚取り出して、パリィに手渡しす。
パリィは興味深そうに眺めた後、匂いを嗅ぎ、ぱくついた。

「うん！　おいしいでし！」

パリィはもにもにと食べながらしゃべる。

「あっ。焼かなくてよかった？」

「んぐっ？　焼く？」

「うん。ちょっと焦げ目が付くぐらいだけどね。俺はそうしていつも食べてるから」

「そうなんでしか？　じゃあご主人しゃまと一緒で、焼いてほしいでし」

「オッケ」

遊はオーブントースターに2枚のパンを入れ、つまみを回す。

ブウウウンという始動音が、部屋に響く。

パリィこれまた興味深そうに、オーブントースターを見つめ出した。

「熱を持って危ないから、触らないようにね」

「あいっ。わかったでし」

遊は元気よく返事をするパリィを見届けると、冷蔵庫の中から牛乳を取り出し、マグカップ2つに注ぐ。

冷たいままでも良かったが、温かいほうが元気がでると思い、電子レンジに入れることにした。

ついでにマーガリンとイチゴジャムを取り出し、食卓に並べる。

後は待つばかりになる。

遊は椅子に座り、パリィを見た。

「ねえパリィちゃん。君のお家ってどこになるの？」

「キザントっていう町でし」

パリィはオーブントースターを眺めながら言った。
遊には聞いたことのない名前だった。
しかもすんなりと出た名前だった。
思いついた架空のものだとするなら、多少はたじろぐのが普通である。事前によほど設定を練っていたのか、それとも本当に召喚してしまったのか。
遊はさらに尋ねてみる。

「お父さんやお母さんは？」
「とーちゃんは別のご主人の使い魔でし。かーちゃんは家でいろいろでし」
「いろいろ？　って主婦ってこと？」
「う～ん。そのシュフってのがよくわからないでし。ご飯作ったり、洗濯したり、服を縫ったり、のいろいろなんでしが……」
「あっ、じゃあ主婦ってことで一応いいと思うよ。ふ～ん。そうなんだ。えっと、じゃあさ、もう一つ聞くんだけど、お父さんやお母さんも、普段からパリィちゃんみたいな獣人の姿してるの？」
「あい？　獣人？　あ～……う～んと、お父ちゃんはヨンガヨンガ族でしけど、かーちゃんはミルミル族でしから……えっとでしね、たぶんご主人しゃまの言う、獣人にはなると思うでし。あっ、でもでも、あっちらから見るとあっちらが普通で、ご主人しゃまがヒューマンタイプってことになるでしよ？」
「あっ、そうか。なるほどね。ごめんごめん、そりゃそうだ」

視点が違えば価値観も変わる。
パリィは獣人と呼称されるのが嫌なようだった。

「でしから、できたら獣人じゃなくて、ヨンガヨンガ族って言って欲しいでし」
「はい。ヨンガヨンガ族だね。ごめん。次からきちんと呼ぶよ」

「あい～」

パリィはにこりと笑った。

それを見た遊は気づく。

今まで微妙な薄暗さでわからなかったが、パリィの上顎犬歯は、両対ともまさに牙とも言うべき長さであった。

八重歯などではない。まさに犬のそれである。

つけ歯とも考えられるが、本物の牙だと遊は思った。

人に話せば一笑に付される考えかもしれないが、年齢から考えられる受け答えの隙のなさ、牙や爪よ体毛のできを考えると、そっちの方がしっくりくる。

そうあって欲しいという願望も、その考えを後押ししている。

するとその時、ピッピッピという電子音がなった。

それはレンジによる牛乳の加熱が終わった合図であった。

「あう。この音ってなんでしか！？」

聞いたことのないだろう奇妙な音に、パリィは耳に手をあて探ろうと澄ました。

しかしパリィの耳は、側頭部にある通常の耳介部の一段上に存在する。

そしてこの時、パリィはすぐさまその場所に手を当てた。

咄嗟の反応にしては慣れすぎていた。

遊は驚き、立ち上がった。

そしてきょとんと見つめるパリィの髪を、優しくかき分け耳の場所を観察した。

そこには、皮膚があった。穴はおろか、それを塞いだ跡もない。

遊はパリィが人間ではないと、確信した。

01話　初めての召喚？

「ご主人しゃま？」

パリィは不思議そうに遊を見た。

遊はその手をゆっくりと下ろす。

「パリィちゃんって牛乳は好き？」

遊はレンジからホットミルクを取り出し、取っ手の方を持ちやすいように反転してパリィに渡す。

受け取ったパリィは鼻を寄せ、くんくんと嗅ぐ。

そして笑う。

「あっ、この匂いっておっぱいでしね！　だったらあっちは大好きでしよ！」

「よかった。じゃあ、熱いから気をつけてね」

遊はもう片方のホットミルクを取り出して、椅子に座る。

そして、熱いのかカップに口をつけてちまちまと啜るパリィを見て、微笑んだ。

パリィの存在が、一番可能性の高かったコスプレではない。となると、新種の生物か人造兵器か宇宙人か、もしくは異世界からの来訪者と考えられる。

これはもうどれを選んでも、非日常の入り口である。どの選択肢でも、大差はない。

映画の様な、漫画のような、小説のような、そんなお伽話のプロローグに似た出会いに、遊の胸は高鳴りを覚えたのだった。

０１話　初めての召喚？（後書き）

さすがに５００文字は……すいません
後でここまでを１話としてまとめるつもりなんで、大目に見て下さい

02話　モンスターテイマー？

香ばしい匂いが部屋中に広がっていた。
それは焼きたてのパンの匂い。
そして互いの右手には、ホットミルクがマグカップに入っており、温まっている。
遊とパリィは、向かい合った席に座っていた。
たった2品のシンプルな朝食であるが、使い魔のパリィには好評だった。
パンの上に、溢れんばかりのジャムを塗ってご満悦だ。
普段は何を食べているのか不明なパリィだが、人間と同じ食事で問題はなさそうだ。
とはいえ見た目は犬が入っているので、ネギやチョコなどは避けるべきかもしれないが。
パリィが一通り食事を終えたのを見計らって、遊は聞く。

「あのさ、パリィちゃんは召喚された使い魔なんだよね？」

パリィはぽかんと口を開き、何を当然なことを、という呆けた表情をする。
口周りには牛乳を飲んだ白い跡が、ひげのようになってついていたため、遊はテーブルの端からティッシュを2，3枚取って、ごしごしと拭く。
パリィは気持ちよさそうに目を瞑った。

「あのね、正直に言うと俺、パリィちゃんを召喚した覚えって全くないんだ。気がついたらベッドの中にパリィちゃんがいて、こうやって今はご飯食べてる。だからパリィちゃんにご主人様って言われ

ても、ピンとこない……ってかほんとに俺が召喚者？　って思っちゃう。だから聞きたいんだけど、パリィちゃんは、何で俺が君の召喚者だって思うわけ？　間違えて、そう思い込んでるだけだったりしない？」

パリィはぱちりと目を開く。

そしてにへらと歯を見せる。

「よくわかんないでしゅけど、ご主人しゃまは絶対にご主人しゃまでし。間違えることなんてありましぇん。あっちがこっちに来たときは、ぐーすか寝てるご主人しゃましかいませんでした。それに感じた魔力も、今ご主人しゃまから流れているのとおんなじでものでしゅから」

「えっ？　魔力？　俺に魔力があんの？」

ファンタジーでは定番だが、それは現実では失笑モノの言葉である。

しかも常時たれ流しているという口ぶりだ。

「あいっ！　しかもすっごい大きいでし！　あっちの町でも、こんな大きな魔力を持ってる人いなかったでし」

それを聞いて、嬉しくないと言ったら嘘になるが、実感はわかないため、どうにも信じられなかった。

「ふ～ん。俺に魔力ねえ」

比較材料がないため、それがどれほどのものかわからない。

実は人間全員が持ってます、じゃあ、価値は微妙だ。

「でもそれに俺、魔力を持ってるとしても、パリィちゃんを召喚した覚えなんてないんだけどなあ」

遊にとって召喚呪文というイメージは、儀式に近い。

何やら難しい文様を描いて、生贄を捧げて、呼び出すという、黒魔術に見られるあれである。

実際にそこまでの過程を必要しないとしても、せめて魔力の方向性は必要だと思う。

となると魔力が暴発でもしたのだろうか。

するとパリィが悲しそうに言う。

「でもでも、あっちは召喚陣から出てきたんでしょ？　きちんと丁寧に描かれてて、ご主人しゃまの魔力で発動した呪文でし。召喚呪文って、きちんと陣を描いて詠唱しなきゃ、発動しないって聞いてるでし……」

「召喚陣？」

「あい。とってもちっちゃかったでしゅけど、きちんとこっちまでこれた本物でし」

パリィは上を指さした。

「最初寝てた部屋にあったやつでし」

そんな陣など、遊にはまるで覚えがない。

いつの間にそんなものが描かれていたのか。ちょっと不気味に思ってしまう。

「えっと、その陣がどれなのか教えてくれる？」

「あい」

パリィは躊躇いなく返事する。
そしてぴょんと椅子から下りる。
２人部屋を出て、階段を登っていったのだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2908ba/

現実世界モンスターテイマー

2012年1月10日22時51分発行